

論文の内容の要旨

題目

教皇ウルバヌス 8 世の治世における蜜蜂表象に関する研究

: ベルニーニの《バルダッキーノ》とサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業を中心として

佐藤 仁

本論は、17 世紀初頭、ローマを治めた教皇ウルバヌス 8 世 (Maffeo Vincenzo BARBERINI, URBANUS VIII, 在位期間 1623 年 8 月 6 日-1644 年 7 月 29 日) が用いた紋章に注目し、その中心的モチーフである「蜜蜂」の表象が担う意味内容を糸口として、ジャンロレンツォ・ベルニーニ (Gianlorenzo BERNINI, 1598-1680) らローマ・バロック美術を代表する美術家たちが関わった教皇庁の装飾事業と、それによって生み出された視覚芸術作品について再考し、新たな視野を提示するものである。

第 1 章では、これまで注目されることのなかった 17 世紀のローマの美術のなかの蜜蜂モチーフに光を当て、その「かたち」について考察する。

蜜蜂は、教皇ウルバヌス 8 世とその実家バルベリーニ家の紋章モチーフであるが、表された蜜蜂を観察すると、在位当初のものと、ある時期を経たものかたちには、重要な違いがあるのに気づく。その分岐点は、1625 年であり、リンチェイ・アカデミー Accademia dei Lincei からウルバヌス 8 世に献呈された蜜蜂の図解 *ΜΕΛΙΣΣΟΓΡΑΦΙΑ* (《蜜蜂図》と表記) にあったと考えられる。この図に示されたイメージは、ガリレオの顕微鏡を用いた 17 世紀初頭の自然科学研究の賜物であり、歴史的意味をもつものである。我々は、ヴァチカン出版局から発行された教皇の詩集や、教皇によって出された勅書に描かれた蜜蜂の姿に、1625 年の前後で、決定的な変化を見出すことができる。それは、科学的図解としての挿絵から、祭壇画や壁画といった絵画芸術へ、さらには三次元の彫刻の世界へと広がり、ローマ中に流布することになったのである。

また、《蜜蜂図》と同時に献呈された、リンチェイ・アカデミーの主催者フェデリーコ・チェージによる蜜蜂の研究書『アピアリウム』 *Apiarium* は、ウルバヌス 8 世をめぐる蜜蜂

の知識の集大成としてさまざまなイメージを編集した資料としてのみならず、当時流布していた教皇讃美のひとつのサンプルとして、意義あることを明らかにする。同時に、それは、サン・ピエトロ大聖堂の教皇の主祭壇、そしてその下にある聖ペテロの墓所を恒久的に装飾するための巨大な天蓋、《バルダッキーノ》(1624–33年)をかたちづくる着想を連想させる資料となることを指摘する。その際、《バルダッキーノ》の頂部に置かれた4つの巨大な蜜蜂が注目される。伝統的な「蜜蜂としての教会」という隠喩を鑑みるならば、頂の蜜蜂は、単なるバルベリーニ家の教皇の目印のみならず、教会組織のヒエラルキーの頂点に立つ「蜜蜂の王」たる教皇を、そして神の摂理にあずかっている教皇の権威を物語る要石としての役割を担い、《バルダッキーノ》を意味づけていると考えられるのである。

第2章では、蜜蜂がもついくつかのイメージのなかでも重要な意味合いのひとつ、聖母にも重ねられた「純潔の聖性」に着目する。この意味とその役割を探求するために、ウルバヌス8世の装飾事業の最初期における、サン・ピエトロ大聖堂身廊の聖歌隊礼拝堂に設けられた「ピエタの祭壇」(1625–26年)と、《バルダッキーノ》の天蓋を支える巨大な4本の捻れた柱、「ソロモンの柱」(1624–28年)を考察の対象とする。

現在は失われた「ピエタの祭壇」を構想したウルバヌス8世にとって、最も重要な意味を持っていたのが、当時、主祭壇に置かれていたミケランジェロの《ピエタ》であった。その事実を確認し、聖母の無原罪の御宿りに関係する聖歌隊礼拝堂の伝統をたどりながら、ウルバヌス8世の聖母信仰について考察していく。その際に重要な意味を持つのが、美術史的にはほとんど顧みられることのない、ウルバヌス8世のメダルやコインである。そこから読み取ることができる聖母の庇護を希う祈りが、ミケランジェロの《ピエタ》に重ねられた可能性を指摘する。

そして、同時期にベルニーニによって制作されていたソロモンの柱に関しては、旧大聖堂の遺産を復活させたかたちであると同時に、ウルバヌス8世の紋章モチーフのひとつ「月桂樹」に結びつくことに注目する。そして、月桂樹をめぐるメディチ家の伝統、それを刷新しようとしたウルバヌス8世の姿勢が、新たなソロモンの柱の誕生に認められる点を考察する。また、そこには、教皇に即位する以前より重要視した古代ローマに由来するふたつの異教的インプレーサがあり、ウルバヌス8世の紋章モチーフの背景には、異教的ローマに結びつく文化的背景があった。そして、月桂樹のモチーフを、造形的にも象徴的にも教会のモニュメントとして相応しい「ソロモンの柱」として変容せしめたのが、蜜蜂の「純潔」と

いう聖性だったということを指摘する。そのための柱の鑄造という工程は、蜜ロウの使用という蜜蜂の恩恵にあずかる意味でも、特別な象徴性を有していると考えられる。

第3章では、蜜蜂は「神の叡智」にあずかっているという古代より伝わる摂理にもとづく思想に着目し、主としてウルバヌス8世の「大天使ミカエル」に関する美術を取り上げ、これまでに様々に議論されてきた《バルダッキーノ》の上部構造について考察を加える。

これまで、サン・ピエトロ大聖堂内の装飾は、礼拝堂や祭壇ごとに個別に論じられることを常とした。こうした研究の方向によって、同時期に行われた装飾事業の互いの関連が十分考察されないという欠陥が生まれた。そうした観点に立つと、同時期に計画され着手された装飾事業の場合、一つの計画が中止・変更になったとするならば、それが他の装飾に影響を与えた可能性は十分考えられる。ウルバヌス8世の装飾事業を概観すると、計画されたが中止されたため忘れ去られることになった大聖堂後陣における装飾事業が注目される。そこで、この後陣における装飾計画（1626年、実現されず）を糸口として、大聖堂内北西の「大天使ミカエルの祭壇」（1627-28年、現在もあるが当時の姿ではない）、ジョットの《ナヴィチェッラ》の大聖堂内への移設（1628-29年、現在は別の場所にある）、そして《バルダッキーノ》の上部構造（1628-33年）へとつながる、いわば教皇の着想の「糸」があることを明らかにしてゆく。その際の考察のポイントとなるのは、ウルバヌス8世と大天使ミカエル信仰、教皇による新たな聖歌の制定（1629年には完成）、そして1626年の教皇のメダルより刻まれた、祈りのモットーTE MANE, TE VESPERE（日の出に、日の入りに汝に）である。こうした観点は、これまでの美術史研究では考察の対象として取り上げられたことはなかった。

そして、蜜蜂の王のごとくに「神の摂理のもとで教皇に選出された」といったウルバヌス8世の「神の摂理」信仰と祈りは、ベルニーニによって、《バルダッキーノ》の上部構造のかたちに、「教皇冠の戴冠」を暗示する細部を伴って実現されたという解釈を提示する。その際、《バルダッキーノ》を見上げる地下からの視点の重要性を指摘する。設定された視点からみると、そこには、ミケランジェロのプランに基づく大聖堂中央交差部空間の建築全体を、「聖三位一体」のイリュージョンの場へと再編しようとするベルニーニの意図が垣間見える。《バルダッキーノ》の比類ないかたちの背景には、計画段階で中止された後陣における装飾計画以来の、ウルバヌス8世が望んでいた中心的な着想があると考えられるのである。